

ヒンドゥー法典のシュードラ規定

——義務と儀礼的地位について——

山崎 元 一

はじめに

インドの身分制度として知られる四ヴァルナ制度が成立したのは、後期ヴェーダ時代（前一〇〇〇—前六〇〇年頃）の半ばごろのことである。つづく時代に、社会の秩序化・固定化をめざす正統派のバラモンによって、この制度は理論面できらに発達させられた。彼らの努力はやがて「ダルマニーストラ律法経」のなかに結実することになるが、そうしたバラモンの努力にもかかわらず、理論と現実との間には大きな隔たりが存在した。筆者は前稿「古代インドのシュードラ——律法経、仏典、『実利論』を史料として——」⁽¹⁾において、シュードラに焦点を当てつつヴァルナ制度のもつこうした一面を論じたが、本稿では前稿の諸史料より後代に属するヒンドゥー法典類を取り上げ、同じ問題を考察してみた。ただし紙数の関係から、検討の対象はシュードラの「義務と生活」「儀礼的地位」の二点に置かれている。前稿ではさらに「結婚」「犯罪」「シュードラへの転落と窮迫時の法」などの諸項が扱われているが、

これらの検討は次稿に譲りたい。

ヒンドゥー法典類のなかでも『マヌ法典』のシュードラ関連規定は最も詳しくかつ整備されている。各節では、まずそれらの規定を筆者なりに整理して紹介した。一方、『マヌ法典』のこれらの規定と、『律法経』や後期ヒンドゥー法典に収められた諸規定とを逐一対比してみると、重要な規定で『マヌ法典』に欠けるものも見出される。各節の後半部分では、そうした諸規定——とくに後期ヒンドゥー法典中のもの——を検討した。また主として註において、九世紀以後に書かれた註釈文献のなかの記事を紹介した。なお、わが国ではしばしばシュードラが「奴隸階級」と訳される。奴隸のなかにシュードラ出身者が最も多かったことは確かであろうが、シュードラは主人の所有物としての奴隸ではない。またシュードラはヴァルナ社会から排除された不可触民とも範疇を異にしている。シュードラと奴隸・不可触民との関係については、別稿を参照していただきたい。⁽²⁾

一 シュードラの義務と生活

『マヌ法典』は、『リグ・ヴェーダ』の「原人の歌」に遡る説に拠りつつ四ヴァルナの起源を説明している。すなわち、世界の創始に際し、造物主はその口からバラモンを、腕からクシャトリヤを、腿からヴァイシャを、足からシュードラを、それぞれ創出したというのである(1.3)。各ヴァルナ独自の権利・義務としては、バラモンには「ヴェーダの教授、他人のための行祭、布施を受けること」、クシャトリヤには「人民保護、および感官の楽しみに執着しないこと」、ヴァイシャには「牧畜、商業、金貸し、耕作」、シュードラには「上位三ヴァルナに不平

を言わず奉仕すること (sūśrūṣā anasūyaya)」がそれぞれ定められている。これら四ヴァルナのうち上位三ヴァルナに属する者は再生族 (dvija, dvijāti) と呼ばれ、「ヴェーダ学習、自己のための行祭、布施」を共通の義務としてもつ。これに対しシュードラはヴェーダの祭式への参加を許されず、一生族 (ekaja, ekajāti) と呼ばれ、アーリヤ社会の聖法 (śāstra) の枠外に置かれている (I, 87-91; VII, 410; X, 4, 75-80, 126; XI, 236)。四ヴァルナ所属者のすべてには、自己のヴァルナの義務に忠実であるよう強く求められた。義務を放棄する者は、死後に亡霊 (preta) となり、また悪しき輪廻を繰り返すという (XII, 70-72)。

シュードラの社会的役割に関する諸規定を拾ってみるならば、まずシュードラは再生族に対する奴隸的奉仕 (dāya)⁽³⁾ を義務とする存在であるとされる (VII, 410-414)。そうした彼らに相応しい性質・態度は、清浄 (śuci)、上位者に対する従順 (utkrīṣṭasūśrūṣu)、穏やかな言葉 (mīdvaś)、私心なきこと (anahankīta)、功德を求めること (dharmaṇsu)、自己の義務を知ること (dharmañña)、有徳者の行為に倣うこと (satāṇ vīttam anusīhita)、嫉妬せぬこと (anasūyaka) などであり、これら具备了たシュードラは、現世においては世人の称讃を、来世においては勝れた「生まれ (jāti)」を得ることができると説かれている (IX, 335; X, 127-128)。

奉仕の対象としてはバラモンが最上とされ、学識・人徳ともに高いバラモンに奉仕することによって天国に生まれるなど至上の幸福が得られるという (IX, 334; X, 122)。さらに、バラモンへの奉仕のみがシュードラにとって勝れた仕事であり、それ以外の仕事は何の果報ももたらさないとさえ述べられている (X, 123)。また、シュードラは自存神 (śūnyatā) によってバラモンへの奴隸的奉仕のために創出されたのであるから、バラモンはシュードラに対

し、彼らが奴隸身分であらうとなかろうと奉仕労働を強制できるとも主張されている (VII, 413-414)。

バラモンへの奉仕がかなわぬ者は、生計の資を得るためにクシャトリヤと富裕なヴァイシヤに奉仕する (X, 121)。そして、再生族への奉仕がかなわず、家族を抱え窮迫した場合にのみ、再生族の役に立つような技術職 (kārūkakarma) や種々の手工芸 (śilpa) に従事することが許されている (X, 99-100)⁽⁴⁾。こうした職人たち (kārūka, śilpin) や肉体労働に従事するシュードラ (ātmopajivin) には、穀物や金銭の形の課税はなく、それに代わるものとして月に一日の割合で賦役が課せられた (VII, 138; X, 120)⁽⁵⁾。なお、シュードラのなかには小作人 (ārdhika)、牧牛人 (gopāla) などになる者もあった (IV, 253)。

王の重要な仕事の一つは、ヴァイシヤとシュードラに各自の義務を遂行させることであつた。もしこれら両ヴァルナが義務を怠るならば、この世は混乱に陥るからである (VII, 410, 418)。ヴァルナ社会の秩序を乱す行為、とりわけ下位ヴァルナによる上位ヴァルナの諸権利の侵害は、厳しい処罰の対象となつた。例えば、低身分 (adhama) にもかかわらず貪欲から高位ヴァルナの職業に就く者があれば、財産没収のうえ直ちに追放すべしとされ (X, 96)、また上位者 (utkṛiṣṭa とくにバラモン) と同じ席に坐らうとする下位者 (apakṛiṣṭa) 註釈家はシュードラとみる (X, 96) があれば、その男の臀部に焼印したのち追放するか臀部を切り取るべしと定められている (VII, 281)。再生族の表徴である聖紐などを身につけるシュードラには体刑が (X, 224)、再生族を侮辱したシュードラには「舌を切断する」「赤熱した一〇指の長さの鉄釘を口に差し込む」などの罰が科され、さらに傲慢にもバラモンに義務を教示するシュードラには、「その口と耳に沸騰した油を注ぐ」という罰が科されている (VII, 270-272)。

奉仕労働に従事するシュードラには、浄めの口噓ぎや、剃髪を行い身体を清浄に保つことが命じられている(V, 139-140)。奉仕に対しては、能力、勤勉さ、扶養家族数などを考慮した上で、適当な報酬が与えられた。そうした報酬として、古衣、穀物屑、古家具などが挙げられている。また、シュードラの食物は再生族から与えられた残飯であるとも述べられている(V, 140; X, 124-125)。

シュードラに対し、たとえその能力があつても富を蓄積すべきではないと命じた規定も存在する。彼らが富を獲得すれば、それだけバラモンを悩ますことになるというのがその理由である(X, 129)。シュードラにとって一般に蓄財は困難であつたと思われるが、一方には「ヴァイシャとシュードラは自分の不幸を富によつて克服すべし」という規定もある(X, 34)。シュードラに対する利息を月に五パーセント(バラモン以下の三ヴァルナはそれぞれ二、三、四パーセント)とする規定⁽⁶⁾も、シュードラにある程度の財産があつたことを前提としている(III, 142)。シュードラはこうした不安定かつ僅少の収入・財産に依存しつつ、結婚し家族を養つた(X, 124)。彼らには自己のヴァルナ以外の女性との結婚が禁じられている(IX, 157)。シュードラの夫婦の間に生まれた息子は、その数がたとえ一〇〇人でも、父の財産を平等に分割相続すべきであるという(X, 157)。再生族に認められている長子相続制(大家族制)や、長子の特別相続分は、シュードラには認められていないのである。なお、シュードラが「女奴隷あるいは奴隷の女奴隷(dasavasi 奴隷の妻か)に生ませた子」は、父であるシュードラの承諾を得れば他の息子らと同じ相続分を受けることができた(IX, 179)。この規定は女奴隷をもつシュードラがいたことを語っている⁽⁷⁾。歴史上、バラモンの眼からシュードラ出身とみられる人物が政治の実権を握ったり、王朝を創始したりするこ

とがあった。土着の王朝としてはナンタ朝やマウリヤ朝がこれに相当し、また西北インドに侵入した外来民族（ムレツチャ）の諸王朝もこの範疇に加えることができよう。こうした王朝のなかには、やがてバラモンの支持を得てクシャトリヤ王朝と称するものも出ている。しかし、原則的には、シュードラあるいはムレツチャによる支配は不法であり、許すべからざるものであった。法典の編者は再生族がシュードラの支配する王国に住むことを禁じ（IV, 61）、また「王に代わってシュードラが法の判定をするような国は、沼地に落ちた牛のように、みるみる沈没する」（III, 21）、「シュードラが非常に多く住み、無神論者に蹂躪され、再生族のいない王国は、飢饉と疫病とに苦しめられ、たちどころに全滅する」（III, 22）などと強調している。なお、狭くはバラモン文化の故郷であるガンジス・ヤムナー両河地帯とその近隣、広くは「北・南をヒマラヤとヴィンディアの両山脈、東・西を両海洋で限られた地域」こそがアーリヤ人の住むべき土地であり、この境界の外に再生族は住んではならぬと定められている（II, 17-24）。ただしシュードラはこの規定の対象外で、彼らはもし困窮に迫られるならば如何なる土地に住んでもよいとされる（II, 24）。

『マヌ法典』に見出されるシュードラの義務と生活に関する諸規定は以上のようなものである。次に「律法経」にあり『マヌ法典』に欠けるものを挙げるならば、シュードラが再生族の監督のもとで主人のための料理をつくることを認めた規定⁽⁹⁾、主人に対しシュードラ扶養の義務を定めた規定⁽¹⁰⁾などがある。「律法経」中のその他の規定は、ほとんど『マヌ法典』中に収録されている。

後期ヒンドゥー法典類にあり『マヌ法典』に欠ける記事のうち、まず注目されるのは、『ナーラダ法典』のなか

の「奉仕労働者 (Sustūṣaka)」の分類に関する規定である (V, 27)。それによれば、奉仕労働者は五種に分類され、そのうちの①弟子 || 学生 (śiṣya)、②年季奉公人 (antevaśin)、③被傭人 (bhṛtaka)、④役人 (adhi-karmakṛt) の四種が浄労働 (subha) に従事する労働者 (karmakara)、最後の⑤奴隷 (dāsa) が不浄労働 (asubha) に従事する者であるとされている。また同法典の別の条 (V, 22-25) では、被傭人 (bhṛtaka) が上位の戦士 (āyudhīya)、中位の耕作者 (kṛṣivāla)、下位の運搬人 (bhāravāha) の三段階に分けられ、いずれも浄労働 (subhakarma) に従事する者と規定されている。⁽¹¹⁾ シュードラの労働は、前者の分類の②と③、後者の分類の耕作者と運搬人に相当するが、いずれの労働も「浄」とみなされている点は注目に値しよう。同法典はまた富の形態を三つに分類し、聖知・武勇・供犠などによって得る富を白 (śukla)、商業・農耕・技術・奉仕労働などによって得る富を斑 (śubhā)、賄賂・賭博・窃盗などによって得る富を黒 (kṛṣṇa) と定めており (I, 44-47)、ここではシュードラの労働とヴァイシヤの労働とが「斑」として一括されている。⁽¹²⁾ 一方、『ヴィシュヌ法典』(III, 45) は、国家の富の源泉がヴァイシヤとシュードラの労働に依存していることを認め、それゆえ王はこれら両ヴァルナの多住する土地 (vāisya-sūdra-praṇā) に住むべきであると述べている。この規定と、シュードラの多い土地に住むべきではないとする *śruti* の『マヌ法典』の規定との間には、シュードラへの対応についてかなりの開きがあるように思われる。

後期ヒンドゥー法典のなかのもう一つ注目される規定に、『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』(I, 120) の「シュードラ (の義務) は再生族への奉仕である。それによって生活できないときは商人 (vaṇi) になることができる。あるいは再生族の利益のために努めつつ諸種の技術^{śilpā}で生計を立てることもできる」というものがある。また『プリハ

スパティ法典』(XIV, 10-14)では、商業の共同経営者の死亡をめぐる諸規定のなかで、他の三ヴァルナ出身者と並べてシュードラ出身の商人の場合を取り上げている。⁽¹³⁾シュードラの商業活動に関するこれらの規定は、『律法経』や『マヌ法典』には見られないものである。⁽¹⁴⁾

註釈文献の時代になると、シュードラによるヴァイシャの職業(農業・牧畜・商業)への侵蝕はいっそう明確となる。『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』(I, 120)のミタークシャラー註では、古聖デーヴァラの言葉を引用しつつ、シュードラの義務(sūtradharma)として次のものを列挙している。すなわち、再生族への奉仕(dvijānusṛta)・悪を離れること(pāpavartana)・妻などの扶養(kalatrādiṣaṇa)・耕作(karsana)・牧畜(paśupālana)・運搬(bharodvahana)・商品の取引(paṇyavyavahāra)・絵描き(citrakarma)・舞踊(nṛtya)・歌詠(gīta)・笛・琵琶・大鼓・小鼓の演奏(veṇu-vīṇā-muraja-nṛdaṅga-vadana)その他である。ここでは、シュードラの義務を隷属的奉仕と定めるヒンドゥー法典の原則は無視され、農民を含む庶民大衆がシュードラとみなされている。

二 シュードラの儀礼的地位

シュードラはアーリヤ人の聖法の枠外に置かれ、またアーリヤ人の諸儀礼(sanskara)への参加を拒否されている(X, 126)。すなわち、ヴェーダの宗教への入門式(ウパナヤナ)を挙げる以前の児童に等しい儀礼的地位に置かれているのである(II, 172)。シュードラのそうした地位はまた、アーリヤ人の女性と同等であり、両者はしばしば並記される。⁽¹⁵⁾しかし、少年はやがて入門の儀式を挙げてアーリヤ社会の正式の構成員となり、婦人は夫に伴って祭祀に参加す

る。これに対しシュードラは儀礼的不浄性を本質とする存在であった。それゆえ、シュードラの近くでヴェータを唱えたり学んだりすること、シュードラのために祭式を執り行うこと、シュードラに教訓を与え、聖法を教え、⁽¹⁶⁾ 誓戒を命ずること、残り物(*ucchiṣṭa*)⁽¹⁷⁾や神への供物の残余を与えること、シュードラに奉仕することなどが禁じられてゐる(III, 178-179; IV, 80-81, 99, 108; XI, 70)。これらの不法な行為は大きな災いの原因になるという。例えば、シュードラに聖法を説き誓戒を命ずる者はそのシュードラとともにアサンヴリタと呼ばれる地獄に墜ち(IV, 81)、シュードラ(*visala*)に祖霊祭の残飯を与える者はカーストラ地獄にまっさかさまに墜ちる(III, 249)。また供儀のための財物をシュードラに乞うバラモン、シュードラから得た財物で火神への供儀を挙げるバラモンに対しては、それぞれ「死後に不可触民^{アチャタス}として生まれる」「シュードラの司祭となつたその愚者(バラモン)の頭を(財物を与えたシュードラは)足で踏みつけつつ不幸を超える」と、非難の言葉が投げられている(XI, 24, 42-43)⁽¹⁸⁾。さらに、シュードラを弟子あるいは師とする者、シュードラから生計の資を得る者は、シュードラ女性を唯一の妻とする者(*visalipati*)とともに祖霊祭への参加を拒まれている(III, 155-156, 164)。なお、再生族とシュードラ女との同棲や結婚は非難され、両者の間に生まれた息子は他の息子と比べ差別の対象となつた。この種の問題については別稿で検討したい。

以上の他に、死霊が天国に赴くことを妨げるという理由でバラモンの遺体をシュードラに搬出させることを禁じた規定や(V, 104)⁽¹⁹⁾、シュードラとともに旅をすることを禁じた規定(IV, 140)などがある。再生族には、シュードラの残した水や食物、シュードラの調理したもの、などを飲食することが原則として禁じられている(IV, 211,

218, 223; XI, 149, 153)。

しかし、以上にみた諸々の禁止規定のそれぞれを、現実の生活において厳守することはまず不可能であった。法典の編者たちは原則と現実との間のこうした矛盾に直面して、贖罪（浄化儀礼）と例外規定という二つの「抜け道」を用意した。

贖罪の例を挙げるならば、資格なき低賤者のために供儀を行ったり、彼らにヴェーダを教えたりしたことによって招いた罪は、ヴェーダの念誦や火供^{ホーマ}によって除かれ、彼らから布施を受けたことによって招いた罪は、施物を放棄し苦行することによって除かれる、などと説かれる（X, 109-111）。また、シュードラの残した水を飲んだ者は三日間クシャ草を煎じた水を飲むことによって（XI, 149）、シュードラあるいは女性の残飯を食べた者は大麥の粥汁を七日間飲むことによって（XI, 153）、それぞれ浄化されると定められている。⁽²⁰⁾

次に例外規定を挙げてみるならば、まず「シュードラのなかでも（再生族の家に属する）小作人、家族の代々の友人、牛飼、奴隸、理髪師の（用意した）食物は、それを食べることができ。〔生活に苦しみ〕自ら（下僕となることを）申し出た者（の食物もまた食べ得る）」（IV, 253）というものがある。⁽²¹⁾この規定によって、シュードラに「その食物を食べ得る者（下僕や浄性の比較的高い者）」と「食べ得ない者（一般に浄性の低い者）」という上下二層が存在したこと、および、再生族は実際には多くのシュードラの手から食物を受け得ることがわかる。こうした現実との妥協は、窮迫時に低位ヴァルナの職業に就くことや、シュードラから財物を受けることを認めた一連の規定（いわゆる「窮迫時の法」）⁽²³⁾に最もよく示されている。不可触民チャングーラが殺した獣の肉を清浄と認める規定（V, 131）

や、職人の手⁽²⁴⁾を常に清浄とした規定(V, 128)なども、現実的要請から定められたものと言えよう。

すでに記したように、シュードラはヴェーダの浄法^{ヤンスカラ}や聖法^{ダルマ}から完全に排除されているのであるが、一方では「(シュードラには)聖法(の一部を行うこと)に對し何らの禁制もない(na dharmāt pratiśedhanam)」という規定も見出される(X, 126)。この矛盾したようにみえる文言は、註釈家たちによって、ヴェーダの聖句^{マントラ}を唱えずに行う宗教儀礼(家庭の祭式、断食、沐浴など)をシュードラに對して消極的に認めたものと解釈されている⁽²⁵⁾。

こうした儀礼に関する規定を拾ってみるならば、まず命名の際にシュードラには嫌惡(jugupsita)と奉仕(breṣya)を意味する語を名前の前半と後半につけるよう定められており(II, 31-32)⁽²⁶⁾、結婚の形式としては、八形式のうちの第五のアスラ婚(花婿側が多額の富と交換に嫁を取る)、第六のガンダルヴァ婚(恋愛結婚)、および最低かつ最も罪深い第八のピシャーチャ婚(睡眠・酩酊などで感覚を失った娘を誘拐する)が認められている(III, 21-24)。シュードラに認められたこの三形式は、ヴァイシャに認められたものと同じである。またシュードラが親族の死により不浄となる期間は一箇月とされ(バラモン以下の再生族はそれぞれ一〇日、一二日、一五日)、遺体の搬出は町の南門から(バラモン以下はそれぞれ東門、北門、西門から)、喪の不浄期間の終りの儀礼は杖(yasti)に触れること(バラモン以下はそれぞれ水、乗用獣と武器、突棒あるいは牛の鼻綱に触れる)などとされる(V, 83, 92, 99)。

挨拶もまた儀礼的行為である。『マヌ法典』はバラモン以下の各ヴァルナに對し、それぞれ「幸福(kusala)」「息災(aśānaya)」「繁栄(kṣema)」の語をもって挨拶し、シュードラに對しては「健康(arogya)」の語をもって挨拶すべきであると定めている(II, 127)。バラモンの家にやって来たクシャトリヤ以下三ヴァルナの客は、「賓客

(aitini)』とは呼ばれない。しかし彼らもまた一定の条件のもとで（旅行中に食糧の尽きた者、他村の者、食事時間に到着した者）相応の接待を受けた。そうした客として訪れたヴァイシャとシュードラには、憐憫の情を示しつつ被傭人とともに食事を与えるべきであるという（III, 110-112）。なお、尊敬を受ける対象となる五要素、すなわち財富、血縁関係、年齢、行祭、聖なる知識のうち、シュードラが関係するのは年齢のみであった。九〇歳以上の老人は、シュードラといえども敬われねばならぬと定められている（II, 136-137）。

以上にみてきたように、『マヌ法典』はヴェーダの祭式（アーリヤ社会の祭式）からシュードラを排除しつつ、ヴァルナ社会の一員として、彼らにながしかの儀礼的地位を与えているのである。また、二、三の規定でシュードラとヴァイシャが並記され、同等に扱われている点も注目される。

次に、本節に關係する規定で、『律法経』にあり『マヌ法典』で欠けたり内容を一部異にしたりするものを挙げてみるならば、挨拶の身振りについての規定、客として訪れたシュードラをもてなす方法についての規定、シュードラに身体を触れられた者に食事の中断を命ずる規定などがある⁽²⁷⁾。また『マヌ法典』が九〇歳以上のシュードラを尊敬すべしと定めるのに対し、八〇歳以上と一〇歳低い年齢を定めるものもあり、さらに、遺体を搬出した者の不浄期間や、シュードラの料理を食べたバラモンの罪の深さに關係した規定のなかに、『マヌ法典』の規定より詳しいものも見出される⁽²⁹⁾。

後期ヒンドゥー法典にあり『マヌ法典』に欠けるものとしては、まず遺体の搬出をめぐる諸規定がある。この問題に関して『マヌ法典』は、シュードラに搬出されたバラモンの遺体は穢れるとして、そうした行為を避ける

よう命ずるだけであるが(V, 104)⁽³⁰⁾、『ヴィシュヌ法典』では、シュードラもまた再生族の遺体に随伴することによって穢れると記されている。⁽³¹⁾すなわち、①シュードラの遺体に随伴した再生族、②再生族の遺体に随伴した再生族、③再生族の遺体に随伴したシュードラは、いずれも浄化儀礼を必要とするというのである。もちろん、不浄の度合いは①が最大、③が最小であるが、右の規定は再生族とシュードラの儀礼的地位の差を認めつつ、シュードラを排除せずヴァルナ社会の一員として位置づけている。

すでにみたように、再生族にとってシュードラの食物は避けるべきものであった。そのシュードラが不浄期間中であればなおのこと、彼らの食物は忌避される。再生族の食物でも、彼らが不浄期間にあるときは、それを食べるのが禁じられる。『ヴィシュヌ法典』(XXII, 10-17)は、不浄期間中の者から与えられたものを食べることが再生族に禁ずる一方、シュードラに対しても不浄期間中の再生族の食物を食べることを禁じ、違反したシュードラには浄化のための沐浴を命じている。シュードラに命じられているこの沐浴は、再生族が不浄期間のシュードラの食物を食べた場合(ブラジャーパティヤ贖罪)⁽³²⁾にくらべて簡単なものであるが、再生族の食物によって穢されたシュードラに関する規定は、この法典以前には見出されない。また同法典は不浄期間中のシュードラの食物を食べたシュードラに「沐浴とパンチャガウヤの飲下」⁽³⁴⁾を命じ(XXII, 18)さらに、⁽³⁵⁾きわめて汚れた井戸水を飲んだときの浄化方法を、シュードラを含む四ヴァルナすべてに定めている(LIV, 27)。一方『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』は、死者を出した家の不浄期間について、バラモンは一〇日、クシャトリヤは一二日、ヴァイシヤは一五日、シュードラは三〇日と定めたあと、「ただし法に従って生活するシュードラはその半ば(一五日)でよい」

と付記し、シュードラとヴァイシャを同等に扱っている(III, 18, 22)。同法典にはまた、「シュードラは(儀礼を行う)権利をもたない者であるが、時間によって浄められる (śūdra 'dhikarāṇo 'pi kālenaena śuddhyati)」という一句がある(III, 262)。これは註釈家によって、シュードラはヴェーダ聖典の念誦ジャパなどを行う資格をもたないが、一定の年月の間、シュードラに許される範囲の誓戒ヴラタに従い、自己の義務を果たすことによって浄められる、という意味に解釈されている。⁽³⁶⁾

農民大衆をシュードラとみなす端緒は、地方によってはすでに仏教成立時代に遡るようであるが、前節で紹介したように、この傾向は後期ヒンドゥー法典の時代にいつそう顕在化した。玄奘が七世紀のインドで見たのはこのような社会であり、彼は『大唐西域記』(第二卷)のなかではっきりと「ヴァイシャ||商人」「シュードラ||農民」という関係を記している。一方、バラモンは、原則的には再生族への宗教的サービス(ヴェーダの儀式的執行)に対する報酬を生計の支えとしていた。したがって、庶民のシュードラ化はバラモンにとって経済的に大打撃となるはずである。バラモンはこの危機にどう対処したか。P・V・カネーの研究に拠りつつ、この問題について一言しておきたい。⁽³⁷⁾

シュードラがヴェーダの祭式から排除されながらも、⁽³⁸⁾実質的には再生族のものと近似した宗教儀礼を行っていたことは、右にみた通りである。シュードラにとってさらに救いとなったのは、『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』という二大叙事詩と、古伝承「プラーナ」の存在である。『バーガヴァットプラーナ』などの語るところによれば、これらのヒンドゥー教の聖典は、ヴェーダの宗教から排除されたシュードラや婦人を含むすべての人びとの幸

福・救済・啓発のために、慈悲深い古聖が創作したものであるという（ただしシュードラは、これらの聖典中に引用されるヴェーダの聖句を読み聞きすることはできないとされた）。シュードラ自身が叙事詩やプラーナを学ぶことについては、それを許す一派と許さぬ一派との対立があり、後者の立場の方が有力であった。すなわちシュードラは、バラモンの口を通じてそれらを聞くことで満足すべきとされたのである。

シュードラにはまた、「律法経」の時代から「*namah*」という聖句^{マントラ}を唱えることが認められていた。西暦紀元以後、とくに五世紀以後になると、古伝承^{ブラミナ}に起源する新しいマントラ（*Paurāṇika-mantṛa*）がバラモンの手で数多く作られ、しだいにヴェーダのマントラを凌ぐ重要性をもつようになった。この種の新しいマントラは、シュードラの祭式においても唱えうるものとされた。カネーの意見によれば、これらは仏教信者であるシュードラ大衆を懐柔し自陣に引き入れるため、バラモンが創作したものであるという。⁽³⁹⁾これらのマントラをシュードラ自身が唱えることを認める一派も初期には出たが、やがて多数派の見解は禁止の方向に傾いた。すなわち、シュードラは儀礼にさいし、バラモンを招き彼らにマントラを唱えてもらわねばならないのである。バラモンはこのように、ヴェーダからのシュードラ排除という一線を辛くも維持しつつ、司祭者としてシュードラの儀礼に参加することになった。換言するならば、バラモンは宗教上の譲歩と引換えに、安定した収入の道を確保することに成功したのである。

おわりに

『マヌ法典』および後期ヒンドゥー法典類に見出されるシュードラの義務と儀礼的地位に関する諸規定は、以上のようなものである。最後に、本稿の要点と残された課題について記しておきたい。

筆者は前稿において次の二点を指摘した。その一つは、正統派バラモンの文献「律法経」が、厳しいシュードラ差別を掲げる一方、贖罪法（浄化儀礼）や窮迫時の法を導入することによって現実との妥協を図っているという点である。また、もう一つは、現実の生活の場ではヴァイシャとシュードラの区別（とくに前者の下層と後者の上層）が不明確であり、したがって「律法経」のシュードラ差別規定が現実の社会でそのまま実施されていたとは考えられないという点である。

『マヌ法典』のシュードラ関連規定には、「律法経」の規定を上回る過酷なものも見出される。こうした『マヌ法典』の姿勢に、外来民族の相次ぐ侵入によって混乱する社会を眼前にした正統派バラモンの危機感を読み取る史家も多い。しかし、この時代にシュードラ差別規定と社会の現実とがいよいよ乖離したこともまた確かである。『マヌ法典』のなかに、「律法経」と比べていっそう発達した贖罪法や窮迫時の法が見られるのは、そのためである。

現実社会との妥協は、後期ヒンドゥー法典およびその後の註釈文献の段階になるといっそうはつきりする。すなわち、本稿各節の後半と註釈の部分で記したように、いずれの文献も古来のシュードラ差別規定を原則として

掲げつつ、一方では規定を弛め、シュードラに譲歩している。換言すれば、シュードラを排除した「アーリヤ社会」の観念が後退し、シュードラを仲間に加えた「ヒンドゥー社会」の観念が徐々に前面に出てきているのである。そして、この四ヴァルナから成る社会の枠の外に不可触民集団が置かれている。この構造は、今日のインド社会におけるカースト⁴⁰とヒンドゥーと不可触民（指定カースト）という二大区分と同じものである。

R・S・シャルマは、後期ヒンドゥー法典類に見られるこのような傾向を一論拠として、この時代にシュードラの地位が上昇したことを論じている。すなわち、シュードラの地位が奴隸的隷属から農奴的なものに上昇したというのである。⁴⁰シャルマのこの指摘は、インド史の時代区分に直接関わる重要なものであるが、前稿でも論じたように、仏典や『実利論』のなかにすでに農民を主体とする生産大衆をシュードラの範疇に加える傾向の端緒が見出されるのである。後期ヒンドゥー法典類の記事は、シュードラの地位の上昇というより、むしろシュードラの範疇のこうした拡大、すなわち従来ヴァイシャとみなされていた者をシュードラの範疇に加える傾向の一般化を示すものであろう。

ヒンドゥー法典類を史料に用いて歴史を叙述する場合には、常に理想論と現実とのギャップに留意せねばならない。ヒンドゥー法典から得られるシュードラ像を、文学作品・宗教作品・刻文などの記事との比較検討を通じて修正してゆく作業が、今後の課題として残されている。

註

本稿で使用した史料は次のものである。「律法経」関係の文献は註(一)の論文を参照いただきたい。

G. Bühler (tr.), *The Laws of Manu*, Oxford, 1886.

J. Jolly (ed.), *Mānava Dharmasāstra*, London, 1887.

G. Jha (tr.), *Manu-Smṛiti, The Laws of Manu, with the Bhāṣya of Medhātithi*, Calcutta, 1920-26. Do., *Manu Smṛiti Notes*, 3vols., Calcutta, 1924-29. M. Mora (ed.), *Manusmṛiti, Medhātithibhāṣya-saṃlambhitā*, 2vols., Calcutta, 1967-71. G. S. Nene (ed.), *The Manusmṛiti, with the 'Manvartthamuktāvali' Commentary of Kullūka Bhaṭṭa*, Vanarasi, 1970.

A. F. Stenzler (ed. and tr.), *Yājñavalkya's Gesetzbuch*, Berlin, 1849. U. C. Pāndey (ed.), *Yājñavalkyasmṛiti, with the Muktīśarṇī Commentary of Viṇṇaśeṣvara*, Varanasi, 1967. J. Jolly (tr.), *The Institute of Vishnu*, Oxford, 1880. V. Krishnamacharya (ed.), *Viṣṇusmṛiti, with the Commentary Kesaravajayanī of Nandapāṇidīa*, 2vols., Madras, 1964.

J. Jolly (tr.), *The Minor Lau-Books*, Part 1, *Nārada and Bṛhaspati*, Oxford, 1889. Do. (ed.), *The Institute of Nārada*, Calcutta, 1885. K. V. R. Aiyangar (ed.),

Bṛhaspatismṛiti, Baroda, 1941. P. V. Kane (ed. and tr.), *Kātyāyanismṛiti*, Poona, 1933.

中野義照訳『ヤーシュニヤヴァルキヤ法典』『マヌ法典』日本印度学会、一九五〇年・一九五一年。田辺繁子訳『マヌの法典』岩波文庫、一九五三年。

(1) 『国学院大学紀要』二〇(一九八二年)・一三〇—一五九頁。

(2) 拙稿「インド古代奴隷制の性格」『インド史における土地制度と権力構造』(松井透・山崎利男編)、東京大学出版会、一九六九年・三—三六頁。同「古代インドの賤民制—不可触賤民センターラを中心として—」『東洋学報』五三—三〇四(一九七一年)・一—四五頁。

(3) クルルカとメーダーティティ (on *Manu* VIII, 412) は「dāya」をそれぞれ「足洗う」(pādadhāvanādi)「足洗う」(pādadhāvanādi)「掃除する」(pādadhāvanādi)と読まねばならぬ。

(4) 「kārakakarma」は「śilpa」の区別は必ずあり、この「kārakakarma」は「料理人などの仕事(supakārādikar-ma)」。「kāruka」は「数人など」(śilpin)と「高き地位の者(kārūkān supakārādīn śilpiḥya iṣaduktir-

siān)と説明」また「silpin」を「木匠 (takṣa) など」

「鍛冶工 (lohakara) など」と説明している。一方、メーデーティティ (on *Mam* X, 99-100) は「kāruka」と「silpin」が同義で料理人 (śūda) 織工 (vaṇṭuvāya) などを指すと記したあと、強いて区別を示せば「kāru (-ka)」は木匠 (takṣaka)・大工 (vārḍhaka) など「silpa」は業の裁断 (patraccheda) 彫刻 (rūpakarma) 絵画 (ālekhyā) などであると説明している。

(5) 「律法経」の一つは、奉仕労働に従事するシュードラを、婦人、児童、学生、苦行者、不具者などとともに課税の対象から外している。Ap. II, 10, 26, 10-17.

(6) アルテーカルは、シュードラの利率が最も高いのは差別ゆえではなく、融資が最も不安定であるという経済的理由によると主張する。しかし、『グヌ法典』の規定の一般的傾向からみて、四ヴァルナ間の利率の差をこうした経済的理由によって説明するのは無理であろう。筆者は利率の差を、正統派バラモン立場から為された身分差別の表現として捉えたい。もちろん、この数字は理論上のものであり、現実はこのままの差別利率が行われていたとは考えられなく。A. S. Altekar's review on *Sūtras in Ancient India* (by R. S. Sharma), *Journal of the Bihar Research Society*, Vol. XLIII-3 / 4 (1957), p.

409.

(7) 再生族の主人と女奴隷との間に生まれた息子の相続分に関しては、『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』までの法典類は何も記さなく。『グヌ法典』(IX, 179) の註釈でメーデーティティは、「バラモンなど(の再生族)が女奴隷に生ませた息子は、生計に必要な分だけは得るが財産相続人とはなれない。これは定まれる規則である (brāhmaṇādinaṃ tu dāsisutaḥ prajivanamātrabhaṇo na rikṭabhāja itī sūtrīḥ)」と説明している。一方、『カーティヤーヤナ法典』(723) では、主人と女奴隷との間に生まれた子を「自由人」として扱っている。

(8) 「yadrāṣṭiraṇ śūdrabhūyīṣṭhaṇ」をメーデーティティは前条との関係からシュードラの法官の多い国 (yatra śūdrā bhūyaṃso vivādanirayakāras) の意味にとっているが、これは疑問。クッルーカは単にシュードラの多く住む地 (śūdrabahujaṇ) と説明するのみ。

(9) Ap. II, 2, 3, 4-9.

(10) *Gaut.* X, 61-63.

(11) 上中下の被傭人に「家の財産の管理・運用のために傭われた者 (kauṭumbika)」を加えた四者が、浄労働者 (śubhākarmakara) など一括される (V, 24-25)。『プリンスペイト法典』(XVI, 10) では、戦士を上級耕作

者を中級、運搬人と家内労働者(*grihakarmakṛt*)を下級の労働者とする。

- (12) 『ヴィシシュヌ法典』(LVIII, 6-8)では、いずれの者でも自己のヴァルナに定められた方法で富を得たならば、その富は「白」、次下のヴァルナの方法で得た富は「斑」、二階級以下のヴァルナの方法で得た富は「黒」とされている。

- (13) バラモン以下の各ヴァルナの共同経営者(相続人)から、王は死者が残した財貨の二〇分の一、一二分の一、九分の一、六分の一をそれぞれ取る。

- (14) 法典類のなかでは、これらの規定がシュードラの商業従事を認めた最初の規定であるが、すでに『実利論』では「実業(*vartta*)」すなわち農業・牧畜・商業をシュードラの義務の一つに数えている。前掲拙稿、一五三一―一五四頁。

- (15) 浄化のため水を綴り口を拭う行為を一回ずつ行う(V, 139)、再生族が両者の残飯を食べることの禁(XI, 153)、再生族が浄化儀礼中に両者と会話をすることの禁(XI, 224)。

- (16) メーダーティティ(*on Mamu IV, 80*)によれば、生計の手段(*vṛtyarthā*)としてシュードラに助言を与えることは禁じられているが、バラモン家とシュードラ家の

間に代々交友関係(*kulamitra*)がある場合に、友情(*maitri, sauhārda*)からシュードラに助言を与えることは可能であるという。

- (17) シュードラに残飯(*ucchiṣṭa-anna*)を与えることを認めた規定(X, 125)と禁じた規定(IV, 80)があり矛盾するように見えるが、註釈家クッルーカは、はじめの規定を当該再生族のもとで隷属的奉仕をするシュードラ(*dāsasūdra, āśritasūdra*)、後者の規定を当該再生族と関係ないシュードラ(*adāsasūdra, anāśritasūdra*)を対象としたものとみている。

- (18) これらの規定を註釈するにあたり、メーダーティティは、供儀のための財物をシュードラに乞うことを禁じたものであり、扶養者を養うための財物(*bhṛtyabharāna*)を乞うことを禁じたものではないと説明し、また乞わずにシュードラから得たもの(*ayāctopapanna*)は禁止の対象とはならないと述べている(XI, 24)。さらに、シュードラから得た財物をもってアグニホートラ(火供)を行うことを禁じた規定(XI, 42-43)について、この規定は他の儀礼を拘束するものではないと説明している。いずれの説明も『ヌ法典』中のシュードラ排除規定を弛めるものである。

- (19) 遺体は死者と同ヴァルナの者が運び出す。同ヴァル

ナの方がいない時は次位ヴァルナの者に搬出させる。シユードラに搬出させるのは最後の手段である。クシャトリヤとヴァイシヤの遺体もシユードラが触れると穢れるため、これと同様にする(クッルーカ、メーダーティティの註釈による)。

- (20) 『マヌ法典』には「その手から食物を受け取って食べてはならぬ者」の長いリストが掲げられている(IV, 207-220)。彼らが与えた食物を知らずして食べた者は三日間の断食、知って食べた者はクリッチュラ贖罪(断食を含む一二日間の苦行)を行うべきであるという(IV, 222)。
- (21) ārdhikāḥ kulamitran̄ ca gopālo dāsanāpitau, ete śūdr̥eṣu bhojyānā yas̄ ca ātmanam̄ nivedayet. 「耕作者・家族の朋友・牧牛者・シユードラ族の中にあっては奴隷および理髪者……」とシユードラを限定する中野義照訳は採らない。

- (22) 註(20)のリスト(IV, 207-220)に挙げられた人びとのうち、シユードラおよび賤民に属すと思われるものを拾えば、次のようになる。音楽師(gāyana) 大工(takṣan) 獵師(mṛgavyu) 舞踊者(sauṣṭya) 裁縫師(tunavāya) 鍛冶師(karmāra) 舞台俳優(raṭ-gātaraka) 籠造り(veṇa) 犬飼(śvavac) 酒売(śaṇḍika) 洗濯人(calanirñjaka) 染物師(rañja-

ka) 皮革工(carmāvartakart̄in) その他 金工(suvarṇakart̄i) 高利貸(vārdhusika) 医師(cikitsaka) 武器商人(Sastravikrayin) の名も挙げられている。

- (23) IV, 223; X, 81-108, 116; XI, 11-14. 「窮迫時の法」については次稿で検討する。「律法経」中の規定については、前稿一四六—一四八頁を参照。

- (24) メーダーティティは「職人」を「料理人・染物師・織工などの技術者(karavah, śilpinah, sūdra-rañjaka-tantuvāyādayah)」と説明し、クッルーカは「花環造り(mālākāra) など」と説明している。「死」や「出産」の不浄期間にあつても彼らは「可触(spiṣyatā)」。「もちろん糞便で汚れた手までを「浄」というわけではない。また「生まれが不浄の者(svabhāvāśuci)」が職人の仕事をしても「可触」「浄」とはならない(メーダーティティ)。
- (25) 「na ca śūdravivṛitvat̄ pākayañjādiharmad asya niścedhah」(Kullūka) 「yeṣu śnanopavāsavratādiṣu…… tādśebhyo dharmebhyo na pratiścedhah」(Medhātithi) 『マヌ法典』のこの規定(X, 126)は、シユードラに対する譴歩を簡潔に記したものである。シユードラにウェーダのマントラを伴わない浄法(誕生式、命名式、結婚式、葬式などの通過儀礼、その他日常の儀礼)が認められていたことについては、次の研究をも参照。P. V.

Kane, *History of Dharmasāstra*, Vol. II, pp. 159, 198—199. なお「律法經」は、シュートラに許される日常の祭祀におおつてヴェータのマントラを唱えることを禁じ、「*namaḥ*」と云うヴェントラののみを認めている。*Gaut.* X, 64. (26) パラモンの場合は、名前の前半と後半にそれぞれ吉祥 (*maṅgala*) と幸運 (*sarman*) を意味する語を、クシヤトリヤには同様に力 (*bala*) と保護 (*rakṣā*) を、ヴァイシヤには富 (*dhana*) と繁栄 (*puṣṭi*) を意味する語をつける。

(27) *Āp.* I, 2, 5, 16; *Āp.* II, 2, 4, 19-20; *Āp.* I, 5, 17, 1.

(28) *Gaut.* VI, 10.

(29) *Gaut.* XIV, 23-27; *Vas.* VI, 26-29.

(30) 『ヤーシニヤヴァルキヤ法典』(III, 26) もまた、パラモンに対して、パラモン以外の再生族とシュートラの遺体に随従するものを禁ずるのみ。

(31) *Viś.* XXII, 63-65. cf. *Viś.* XIX, 1-2.

(32) ①の場合は川に入り沐浴しながら *Aghamarṣana* の聖句を三回唱え、水中より出てから *Gāyatrī* の聖句を一〇〇八回唱える。②の場合も同様な方法であるが、*Gāyatrī* を唱えるのは一〇八回でよい。③の場合は沐浴のみである。

(33) 最初の三日間は夕食のみ、つづく三日間は朝食のみ、

つづく三日間はをわずに得たものののみを食べ、最後の三日間は完全な断食 (*Viś.* XLVI, 10)。

(34) パンチャガウヤ (*pañcagavya*) は、牛から得られる五種の物、すなわち乳、ヨーグルト、バター、尿、糞。同じ『ヴィシヌヌ法典』(LIV, 7) によれば、パンチャガウヤを飲んだシュートラはスラー酒を飲んだパラモンと同様に、マハラウラウア (大叫喚) 地獄へ墜ちるとあり、本文中の規定と矛盾する。

(35) パラモン以下の三ヴァルナは、それぞれ三日、二日、一日の断食、および警戒のあとパンチャガウヤの飲下。シュートラは一夜の断食。

(36) *yady api śūdro japādyadhikārahinas tathāpy anena dvādaśavarsikādīkalāsampādyaena vratena śūdhyaṭi:..... śūdraḥ kalena śūddhyet govrāhmaṇahite rataḥ, dānair vā 'py upavāsair vā dvijaśuśrūṣayā tathā.* (*Mitākṣarā*)

(37) P. V. Kane, *op. cit.*, Vol. I, pp. 893-896; Vol. II, pp. 155-159, 198-199; Vol. V, pp. 920-930, 1641-1642.

(38) 少数派ではあるが、古くより、ヴェータの祭祀の一部へのシュートラの参加を認める一派も存在したらしい。*Ibid.*, Vol. I, pp. 893-894; Vol. II, pp. 155-157; Vol. V, pp. 1641-1642.

(39) *Ibid.*, Vol. V, pp. 922, 925-926. ハクティ信仰の普及とともに、シヴァやヴィシュヌの名を唱えるマントラが、シュードラはもとより不可触民にも認められるようになる。一三文字のラーマ=バンタラ (Sri Rama jaya Rāma jaya jaya Rāma) と、五文字のシヴァ=バンタ (Namah. Sivāya 再生族は Om を頭に付けた六文字) などがある。*Ibid.*, Vol. II, p. 158.

(40) R. S. Sharma, *Sātras in Ancient India, a social history of lower order down to circa A. D. 600*, 2nd rev. ed., Delhi, 1980. シュードラ研究の最大の成果である本書については、筆者の書評がある。『東洋学報』六三—一・二合併号(一九八一年)二二四—二二三頁。